

# ぱびるす

聖学院大学総合図書館報

第43号 (2006年9月)

発行・編集 聖学院大学総合図書館  
〒362 8585 埼玉県上尾市戸崎1番1号  
電話 048 725 5461 FAX 048 780 1096  
E-mail : lib@seigakuin-univ.ac.jp  
URL : http://www.seigakuin-univ.ac.jp/scr/lib.asp



## 本 を読もう! ~先生方一押し、選りすぐりの本~

2階閲覧室に推薦図書コーナーがあるのをご存知ですか?そこには「政経の100冊」「ライフデザイン・良く生きる」「推薦図書」という3種類のカテゴリーに分かれて、先生方一押しの様々な本が並んでいます。各カテゴリー別にそのコンセプトと先生方からの情熱を込めた本の推薦をご紹介します。

### ● ● ● 政経の100冊 ● ● ●

とにかく一冊でも多くの本を読んで欲しい、できれば一生の財産になるような学術書をと、どの教員も願っていることでしょう。ところが、ほとんどの学生は学術書はおろか新聞・雑誌すら読まず、活字とは縁遠い生活を送っているのが実情でしょう。学生の諸問題に先駆的に・献身的に取り組んでいる政治経済学科では、とにかく四年間の学生生活で100冊は読んで欲しいということで、各教員が推薦して100冊の本をそろえて、図書館の推薦図書コーナーと政経特区(四号館食堂)で自由に閲覧できるようにしました。並べて置いておけば、学生が喜んで読んでくれるという甘いものではないことは承知しています。そこで、一工夫しました。鉄は熱いうちに打てということで、FOで学生にこの100冊を紹介することにしましたが、ただためになるから読みなさい、ということでは心に響きません。各教員がこの一冊を紹介し、学生が五段階で採点することにしました。「5点 是非自分で買って読みたい」「4点 時間があれば読むよ」「3点 暇だったらなあ」「2点 こんな読むか」「1点 こんな本まじかよ」という学生の実感に近い採点基準でおこないました。情報公開の時代ですから、教員の解説、推薦の言葉が終わった段階で、すぐその場で採点公表です。

今後は、100冊完読した学生の表彰、感想文コンクールなど、学生が少しでもこの100冊の本を身近に感じられるイベントを構想しています。さて、この100冊のリストを見て、私もこっそり何冊読んだか数えましたら、43冊でした。半数に届かなかったのはショックでしたが、まあ夏休みの課題として、学生に抜かれる前に完読しておこうと思ってます。皆さんは何冊ぐらいですか、図書館や政経特区に足を運んで数えてみては如何でしょうか。

柴田武男(政治経済学科教授)

#### 徐京植 『私の西洋美術巡礼』

みすず書房 1991年

推薦: 高橋愛子(政治経済学科助教授)

「政経の100冊」には、政治学入門的なものと、長い人生傍らに置いて繰り返し紐解きたいものという二つのカテゴリーから選ばせて頂いた10冊が

含まれている。1冊の紹介をとのことなので、後者のカテゴリーから徐京植『私の西洋美術巡礼』をあげたい。この本は、私が大学院修士課程在学中1年間のドイツ留学へ旅立つに当たって恩師が<sup>ソキョウシク</sup>餞にと贈ってくれたもので、勉強も大事だけれどたまには絵画なども見てヨーロッパの文化の奥深さに触れそこでしか吸えない空気を思い切り満

喫してくるように、とのメッセージが籠められていた。

著者徐氏は、韓国での民主化闘争のゆえに当時獄中にあった二人の兄を支えながら、その出獄を見ることなく闘病の末に他界した両親の死を心に抱き、両親の看取りで疲れ果てた妹を伴って辿っ

たヨーロッパでの旅で、最初のページから圧倒される「苦難にいろどられた」数々の絵画との対話を重ねてゆく。静謐をたたえた絵画が動き始めるのではないかと思わせ、徐氏の心臓の鼓動も聞こえてくるような、静かだが圧倒される一書、是非手にとってみてほしい。

神野直彦著『システム改革の政治経済学』

岩波書店 1998年

推薦：高端正幸（政治経済学科講師）

かつて学生のころ、発展途上国の貧困問題に強い関心を抱いた私は、開発経済学や地域研究ではなく、財政学という領域を探索していこうと決めた。財政学という道具を使って、途上国における国家の役割を考えよう。これが当初の私の発想であった。

ほどなく私は、「市場 vs 国家」という二項対立的な図式の無意味さを知った。ただし、浅学な一学生がそれに代わる有効な問いを定めるには、先

人の助けを借りるほかない。そのとき私に一つの道しるべを与えてくれたのが、『システム改革の政治経済学』であった。

本書は、「財政社会学的アプローチ」により、日本財政の特質を浮き彫りにすると同時に、「財政とは何か」という問いへの一つの解答をも示しており、財政学の範疇をこえ、現代世界の経済・社会を論じるうえで、有益な視座を提供している。

このような本書は、探検すべき宝の山として、また乗り越えるべき険しい山として、未だに私の眼前にそびえ立っている。ご一読をお薦めしたい。

## ❖ 入館ゲート設置にともなう、お願い ❖

図書館の入口に入館ゲートが設置され、5月22日(月)から運用を開始しました。このシステムはIC化された学生証や教職員証をかざすことで、ゲートが開く仕組みとなっています。忘れずに学生証や教職員証を携帯してください。

入館ゲート導入の目的は、図書館内の安全確保です。昨年9月に改装され、図書館の入口が1階へと変り、とても入りやすい雰囲気になりました。これにより、今まで以上に多くの方が図書館を利用されています。

一方、図書館では盗難やケンカといった問題が発生しました。大変残念ですが、図書館の開放が進むに伴い、より防犯体制を整え、利用者の皆さんの安全を確保することが必要となりました。

入館ゲートの導入により、皆さんにはお手をかけることとなりますが、快適な図書館環境を保つため、ご理解とご協力をお願いいたします。



読書の秋...たくさんの本との出合いを図書館は応援します。リクエストも受け付け中

## ● ● ● ライフデザイン・良く生きる ● ● ●

日本文化学科では1年生の必修科目として「ライフデザイン・良く生きるA」「ライフデザイン・良く生きるB」をそれぞれ春、秋学期に設置している。そこには学生個々の尊い人生を大切に育ててほしい、そのためには「将来に続く今＝キャンパスライフ」を充実させることによって、「良きライフデザイン」を描いてほしい、という我々教員の強い願いがこめられているが、この授業の一環として実施している読書指導もまた、当然そうしたコンセプトを反映させたものであり、具体的には「良質の本」「良質の言葉」との出会いを体験し、それが一人ひとりの人生の支えになってくれることを期待している。

村上龍という作家が、「好きなこと」は「探す」のでも「見つける」のでもなく、「出会う」のではないか？将来にわたって経済的・精神的に自分を支えてくれる仕事や趣味や生きがいの芽は、必死になって探したから見つかるというものではなく、あるときふいに会うのではないか。”というようなことを述べているが、まさに、「将来にわたって自分を支えてくれる」ような好きな本、言葉との「出会い」があってほしいと私たちは考えている。そして、そうした「出会い」を実現するために必須な条件である「好奇心」をくすぐりたいと思っている。学生たちには教員各自の推薦図書リストを提供しており、そこには学生たちの「好奇心」を刺激する個々の作品についての簡潔な「招きの言葉」が記載されている。

私たちの「招き」が、一つでも多くの本との「出会い」を学生たちにもたらしてくれることを切に願っている。

清水 均(日本文化学科教授)

エーリッヒ・フロム著『愛するということ』  
紀伊国屋書店 1991年

推薦:バーガー・デービッド(日本文化学科教授)

ドイツ系ユダヤ人であるエーリッヒ・フロムは世界的に有名な精神分析学者であった。この本でフロムは「人間の存在意義」として愛のより大きな現象、そして6つの基本的な愛の種類(親子愛、兄弟愛、母性愛、性愛、自己愛、神の愛)について書いている。

キリスト教で言われる「あなたの隣人を愛せよ」の愛は兄弟姉妹愛である。フロムはこの愛を「すべての形の愛の根本にあるもっとも基本的な

種類の愛」と言っている。フロムはこの本の中で愛について主イエスのユダヤ教的視野をこのように語っている。

「もともと、愛とは特定の人間に対する関係というものではない。それは一つの態度、すなわち性格の方向性であり、ある人がある愛の対象に対してではなく、全体としての世界と関係するその仕方を決定するものである。」

フロムはこの世界で生きるための本質をとらえている。すなわち、主イエスが教えられたように愛とその様々な証を通して我々は周りへと繋がっていき、人間の存在意義を見いだしていくのである。

### 絵本の並び順が変わります

図書館の4階閲覧室にはたくさんの絵本があります。これまでは出版社名によって並べられていましたが、9月から、著者名の「あいうえお順」に並べ替えます。

探しやすくなった絵本の棚で、お気に入りの絵本を探してみませんか？



## ● ● ● 推薦図書 ● ● ●

推薦図書は授業科目について必読すべき図書、受講する際にあらかじめ読んでおいて欲しい図書、レポートの課題に関する図書など、文字通り先生方から推薦されている図書です。学生のみなさんの自主的な学習に大いに役立つでしょう。図書館のホームページに教員名の五十音順の推薦図書リストが掲載されていますので、一度チェックしてみてください。

### 文芸春秋編 『日本の論点』 文芸春秋

毎年11月頃発行

推薦：富沢賢治（大学院政治政策学研究科教授）

私は現在、コミュニティ政策学科で3年生を対象に「卒業研究」を担当している。春学期には、『上尾市総合計画』を共通テキストにして、学生の発表能力とレポート作成能力の向上を目指してきた。秋学期には、学生が『日本の論点』から関心のある論点を選び、論文を作成する予定である。できるならばそれを卒業論文につなげてほしいと思っている。

『日本の論点』は毎年発行される論争誌で、その時々日本の主要な問題点を取り上げている。

2006年度版を見ると、①政治、経済、文化、社会、国際などに関して89の論点を取り上げられ、②それぞれの論点をめぐり一人ないし複数の論者が自説を展開し、③各論点の後には「データファイル」として論点の解説と関連資料が紹介されている。

卒業論文のテーマ探しに困っている人、あるいは就職試験の際の小論文作成や面接に役立つ本を探している人は、まずは図書館に行って『日本の論点』の目次を読もう。そして自分の関心に合った論説を読んでみよう。長くて4ページほどなので、すぐに読める。読んだら、その要点を友達に話してあげよう。「スゴイ」という反応が来てくるだろう。

### 昴木蓬生著 『閉鎖病棟』

新潮社 1997年

推薦：相川章子（人間福祉学科講師）

タイトルだけを見るとなにより穏やかではない気持ちになるかもしれない。そんな気持ちで読み始めると、物語についていけないような気持ちになっていくかもしれない。

私はこれまでに精神科病院や施設、地域支援の現場で多くの精神障害をもつ方々と出会ってきた。彼らは社会一般で想像されているいわゆる「偏見」や「差別」とは対極にいる方たちである。真っ正直で、人を思う気持ち（「やさしさ」ともいう）にあふれていて、そのためかむしろ適度な人との付き合い方や、社会を生き抜く術（ずるがしこさ）

を持ち合わせていない人々であった。

本書は、精神科医である著者が、精神科病院のなかの様子を、患者の視点に立って書いている。患者の視点に立ったとき、病院はどうみえているのか、医者は、看護師は、家族はどうみえているのか。そして患者同士の淡々としたお互いのやりとりのなかにあふれてくるお互いを唯一無二の存在として尊重し、大切にしようとする姿を感じ取ることができる。

本書を読み終わったあとには、精神障害者といわれる人々から、人が人と共に生きていくうえで大切なものとはなにかを気づかせてくれるだろう。そして人が人を思うあたたかさを感じたい方にも、ぜひ手にとってご一読いただきたい作品の一つである。

推薦図書コーナーには人気のある本がたくさんあります。期限を守って、みんなで利用しましょう。